



「身近な地球環境問題 —酸性雨を考える—」

(社)日本化学会・
酸性雨問題研究会 編
コロナ社, 1997年10月
220頁, 定価3,000円+税

「酸性雨問題研究会」は日本化学会の下部組織として1993年に結成された。本書は、この研究会によって1993～95年の間に開催された「酸性雨シンポジウム」の内容をまとめたものである。総勢27人の執筆者は、降水化学、環境科学、環境行政、教育、市民運動などに携わっており、酸性雨の化学、観測の方法、モニタリングネットワーク、スギの衰退、東アジア諸国の現状と国際協力体制、市民の取り組み、教育の現場での取り扱いなど、酸性雨問題を幅広い視点で概観している。問題の現状だけでなく、将来に向けた展望も語られており、今何をなすべきかを方向づける、最前線からの熱いメッセージともいえるべき好著である。

高度経済成長期のわが国では、環境問題といえば公害のことであった。それは主として大都市や工業地域及びその周辺に生じる、いわば「局所的」な環境破壊である。しかし最近では、温室効果気体による気候の温暖化やフロン等によるオゾン層破壊のような、「地球

規模」の環境破壊が主役になった感がある。

空間的広がり比較的小さい現象ならば、環境破壊の原因と結果との関係をとらえることはそれほど難しいことではない。しかし、相手が地球規模の環境問題となると、そう単純ではなくなってくる。観察される諸現象の因果関係が絡み合って、当世流行の「複雑系」になってしまうからである。

酸性雨問題も地球規模の環境問題にほかならない。酸性雨の原因物質は、主として人間の社会活動に伴って放出される。それらは輸送・拡散、液相・気相の化学反応、地物への沈着などの複雑な過程を経て、環境全体を酸性化している。もはや雨だけの問題ではない。うえに、各過程の詳細や相互関係についても解明されていないことが多い。

こうした場合もっとも大切なことは、本書で指摘されているとおり、はっきり言えることとそうでないことを区別し、問題に取り組む出発点を明確にすることである。また、執筆者たちはこう言っているように評者には読めた——各分野の基礎知識と信頼できるデータとを共有し、意味の明らかな共通の言葉で議論するのでなくては、問題解決への道りは遠いと言わねばならない——この「熱いメッセージ」は、自然科学に限らず通用する。

(気象研究所 宮尾 孝)